

タイトル：日本近現代の史料をいかに読み解くか
——コミュニケーション、家族、時間などをめぐって——

日時：2022年10月9日（日） 14時～

会場：中央大学多摩キャンパス 3354（対面式）

申し込み：不要

講演者：大門正克氏（早稲田大学教育・総合科学学術院特任教授）

略歴：博士（経済学）。一橋大学経済学部助手、市立大月短期大学経済科助教授、都留文科大学文学部比較文化学科教授、横浜国立大学経済学部教授、同国際社会科学研究院教授を経て現在早稲田大学教育・総合科学学術院特任教授。主要著書は『語る歴史、聞く歴史—オーラル・ヒストリーの現場から』（岩波新書、2017年）、『歴史への問い／現在への問い』（校倉書房、2008年）、『近代日本と農村社会—農民世界の変容と国家』（日本経済評論社、1994年）など。

要旨：史料を読むことは歴史学の基本である。ただし、史料を読む過程や、なぜそのように読み解くのかを含めて研究が発表されることは稀である。ここでは、具体的な史料を用い、今までとは異なる視点から史料を読み解くことで、日本の近現代の特徴を再考する論点を提示したい。とりあげるのは、コミュニケーションスタイル、家族、時間などのテーマである。

このうち、コミュニケーションスタイルと時間についてふれておく。コミュニケーションスタイルでは、「読む」や「話す」といったスタイルの相違が時代の変化とどのように関連していたのか、コミュニケーションスタイルから近世と近代の転換期と近代以降について考えてみたい。時間について、文字史料を用いる歴史学では時系列による理解が一般的であるが、人に話を聞くオーラル・ヒストリーでは、人は経験について時系列で整理しているとは限らず、過去と現在をたえず往還することが多い。時間をめぐるこの相違は、近代の理解にもかかわる重要なものである。このように、いくつかのテーマをめぐって史料読解を検討し、日本近現代の特徴を再考すること、それがこの講演の趣旨である。